



本は身銭を切って買え

館長 塩入秀敏

本を読んだ方がいいか、読まなくてもかまわないか。「万卷の書を読んでも確固たる思想を見出しえないのならば、いっそ本など読まない方がいい」という意見があることは知っている。私のような小人は、一生かかっても高邁な思想を見つけ出すことはできそうにないが、では、本など読まないでいいかという、それもちょっと怖い。ほかの体験を通すのと同じように、読書を通して得られる知識は多いからだ。その上、実体験できない事柄も追体験できる。人生をより良く生きる知恵は、体験を通して得た知識の中から生まれてくるのだから、聖人君子ではない私たちは、本を読んだ方がいいに決まっている。

人が本を読む場合、主に次のような方法をとって読むだろう。

・自分で買った本を読む ・人から借りて読む ・図書館の本を読む

立場上、「図書館の本を読め」と言わなければならないところだが、個人的には「本は身銭を切って買って読め」と言いたい。学生時代に、乏しい仕送りの中から、その1割ほどを絞り出して初めて買った専門書は、私にとってほかの雑書とは全く違う存在だった。書棚では特別の場所を占めて鎮座ましましていたし、冒頭の数行を暗誦できるほど読み込んだものだった。そう、ヘンリ・ライクロフトが「香をかいただけで自分の本の一冊一冊がすぐ分かるのである。ただ鼻先をページの中に突っ込んだだけで、私にはすべてのことがびーんとくるのだ」と言うのは少々大げさかもしれないが、それにかかなり近い感じを抱かせるものだった。ライクロフトはまた、「よそから借りてきた本を読むよりも、どんなにひどくても自分の本で読むほうが私ははるかに好きであった」と言う。自分でなければなしのお金をたたいて買った本に愛着が湧くのが当然である。図書館の本の場合、大切にしなければならぬという気持ちは抱いても、特別な感情は出てこないのが普通だろう。

稀覯本や絶版で手に入らない本、高価でとても手が出ない本は別として、書店に行けば容易に入手できる本はできるだけ自分で買って、自分の本にして読むべきだ。本を読むということは著者と読者が向き合うことだが、教室における教師と学生の関係に似ている。一方、本を買うということは、それより一歩進んで、学生が教えを乞いに教師の家の門を叩くのと同じ意味を持つ。だから、本を買って読むことは、他の方法によって読むより尊い行為であるのだ。

個人がどんなに本を買っても、図書館にしかない本、図書館でしか読めない本は数限りなくある。図書館は図書館として利用しながら、身銭を切ってどしどし本を買い、たくさん本を読む。

目次

本は身銭を切って買え!?
絵本との再会
考えるということ
本から得ること
私にとっての本
図書館ボランティア
本と私と図書館
上田情報ライブラリー実習
図書館を経験すること
本学教員の最新著作
図書館ガイド
図書館ニュース

館長	塩入秀敏
幼児教育学科 講師	金山美和子
幼児教育学科 講師	若山 哲
幼児教育学科 1年	伊藤絵美
幼児教育学科 2年	平林優子
総合文化学科 1年	沼田亜純
日本文化学科 2年	下澤佐織
総合文化学科 1年	天野 恵
総合文化学科 講師	木内公一郎

CONTENTS

1
2
3
4
4
5
5
6
6
6
7
8

絵本との再会

幼児教育学科 講師
金山 美和子

実習前に絵本を選ぶ学生たちはとても真剣である。何歳児にどのような絵本を読み聞かせるのか、保育者として子どもたちに何を伝えたいのかを懸命に考え、まだ見ぬ子どもたちに思いを寄せながら教材の準備をする学生を見る度、頼もしい思いがする。幼児にとっての絵本の重要性は言うまでもないが、絵本との出会いやかかわりが、幼児期だけでなくその後も続くものであることを、私自身、身をもって実感した出来事がある。

数年前、我が家に12冊の古びた絵本が届けられた。姉と私が幼い頃に読んでいたもので、その後年下のいとこの家に引き取られていたらしい。長年物置に仕舞い込まれていたものを叔母が見つめて、持ち主である私たちの所に返してくれたものだった。本棚いっぱいにあった絵本も、いとこたちに読み継がれるうちにわずか12冊に減り我が家に戻ってきたのだが、束ねられた青いビニール紐を解いたときの感動は今でも忘れられないものである。

何気なく絵本をめくり驚いた。私が幼稚園教諭として子どもたちに語り、心に思い描いていたお話の一つ一つの場面は、すべて幼い頃に読んでいたこれらの絵本の中にあつたのである。保育をする上で自然に思い浮かべていた、七匹目の子やぎが大きな振り子時計に隠れる場面も、ヘンゼルとグレーテルが森で見つけたお菓子の家も、古い絵本のそのままの場面であった。幼い頃の記憶はずっと私の中にあり、保育者としての私の一部になっていたことに驚き、少し感動した。おおかみのだらりとたれた赤い舌が怖くて、夜寝る前には「あかずきん」の

お話が読めなかったこと、「みにくいあひるのこ」を読むたびに大泣きしたことなどが思い出された。絵本との再会は、思いがけなく幼馴染に出会えた懐かしさのようでもあった。

同時に、おとなになった私を幸せな気持ちにさせてくれたものは、本の裏表紙の隅に記された名前と日付であった。何時、誰が、どのような機会に絵本を買い与えてくれたのか、父や母、祖母の懐かしい筆跡が残されていた。甲府から遊びに来た祖母と一緒に買いに行き選んだ絵本、病気で長く寝込んだ時に幼稚園の先生からお見舞いにいただいた絵本、それぞれの日付から幼児期の様々なエピソードが思い起こされる。中でも印象深く覚えているのは、お祭りの日には必ず絵本を買ってもらったことである。春、夏、秋に開催される神社のお祭りの度、父は私たちを神社の隣にある書店に連れて行った。着物を着て鈴のついた草履を履き、わくわくしながらお祭りに行くのに、参道に立ち並ぶ夜店で買ってもらえるのは風船だけ。たこ焼きや焼きそばを尻目に書店に連れて行かれた幼い私は、自分の境遇を少し恨めしく思ったものだ。

しかし、今になってみると両親の子育ての姿勢が伝わってきて何やらくすぐったい思いがする。両親が願ったとおりの育ち方をしたとは思えない私だが、気がつけば本に囲まれた生活を送っている。特に絵本とのかかわりは、幼児教育に携わる者として、切っても切れない関係にある。沢山の絵本と出会った幼児期があつてこそ今の私があるのかも知れない。

考える ということ

幼児教育学科 講師
若山 哲

私が美術大学の学生であった時、同級生の中にこんなことを言う学生がいた。「僕は他の人の絵は観ないようにしているんだ、観てしまって真似になってしまうのが嫌だから…。」まあ、美術を志す者にとってオリジナリティというのは非常に大切なものであるからその学生の気持ちも理解はできるのだが、それは違うのではないかと思う。個性やオリジナリティというのはそんなふうに外からの情報を遮断した所から生まれるものではなく、様々な情報を自分なりに昇華していくことで出来上がってくるものだと思うのだ。もし絵画におけるオリジナリティというもの何かしらの影響を受けたものを否定するのであれば画家は日常生活におけるすべての情報をも放棄しなければいけなくなってしまう。もちろんそんなはずは無く、さまざまな体験や感情から画家は絵を描くわけだし、先ほどの学生も何某かの影響を受けないために実際に目を閉じて生活しているわけではない。

なぜその学生は、他者の絵を観るのを恐れるのだろうか。作品というのは絵画でも音楽でもひとつの完成された考えかた、観かたとして具現化されているものである。そのため同種の表現手段をとろうとしたとき影響を受けることと模擬することの違いを錯覚しやすいのである。画家は自分のオリジナリティを守るためにそのほかの作品を見ないのでは無く、注意深く自分なりに昇華していかなければならないのである。

では作り手ではなく一般の人たちにとって鑑賞するという事はどうであろうか。美術館で理解できない作品を観たときに、作品が気に入らないと思えずに、理解できない自分が悪いように思ってしまう人がいる。いまの美術館にはそういったなにか威圧的な雰囲気というものがあるのだ。

本来、絵画というのは見る人自身の好みで鑑賞すればよいのであって、どんなに他の人が素晴らしいと主張しても自分でそう思わなければそれはそれで良いはずなのだ。しかし世界的名画などと言われると、なかなか気に入らないと言にくいようである。だが、たとえモナリザであっても自分の趣味嗜好で好き嫌いを判断しなければならないように思う。

さて図書館報の原稿ということなので、本について触れていきたいと思う。本を読む時にも先ほどの話と同じようなことが言えるのではないかと思うのだ。本の中にはさまざまな考え方が載っている。何か物事について考える時のきっかけとして、本を読むことは非常に有効な手段に思うのだが、はたして本に載っていることをそのまま信じこんでいくのはいかがなものだろう。自分で考えることをせずハウツー本に頼る人たち、マニュアル世代などということが言われるようになって久しい。マニュアル、ハウツーが重宝がられる背景にはその当人の問題だけで無く何かに頼ることによる安心感と、自分なりのやりかた、考え方ではいけないのではないかと、という不安感がそうさせているように思う。それでは本など読まないほうが良いのかということではないだろう。本に書かれていることについて自分なりに考えながら読むことが大切になってくるのではないだろうか。大概の場合、書かれていることは間違っていないのだろうが本当にそうなのか判断しながら読んでいくことが大切のように思う。

社会生活の中で様々な情報を一方的に信じ込む、覚えこむのではなく、自分なりに考え、昇華していくことを大切にしてほしい。

本から得ること

私は本が好きです。小学生の頃は毎日図書館へ行って一日一冊は本を読んでいました。どんなに分厚い本でも夜中まで読んで、次の日には図書館へ行って新しい本を借りて読んでいたので、よく親に怒られました。しかし、今は図書館へ行くこともほとんどなく、漫画ばかり読んでるので、「本を読みなさい。」と怒られます。

私が小学生の頃読んだ本の多くが『ボクの使った、魔法のクスリ』などの魔法の本です。昔は、魔法使いやおばけの出てくる非現実的な不思議な物語を好んで読んでいました。逆に今は、実話などの現実的な話を読んでいます。一番最近読んだのは『itと呼ばれた子』という実際にあった虐待についての話です。

幼児教育学科1年 伊藤 絵美

今まで虐待は実際にどんなことをされているのかニュースや新聞で読んででも暴力や食事を与えなかったということが書いてあるだけで、子どもがどんな気持ちなのかほとんどわかりませんでした。しかし、『itと呼ばれた子』を読むことによって、ニュースなどではわからない虐待を受けた子どもの気持ちや虐待が子どもに与える影響について知ることができます。

本を読むことで、私は漢字を覚えたり、想像力を身につけました。そして、ニュースや新聞ではわからないことを知ることが出来ました。本を読むことは子どもにとっても大人にとっても大切なことだと思います。これからは少しでも多く図書館へ行って色々な本を読みたいです。

私にとっての本

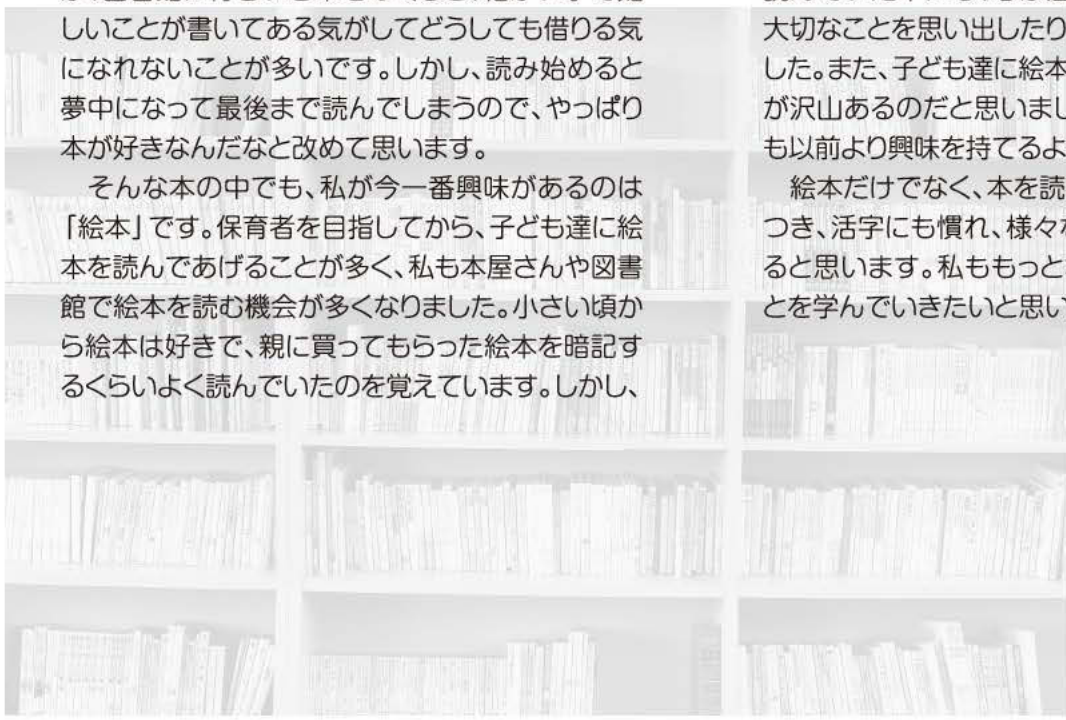
「本」というと、どうしても難しいとか、読むのが大変、面倒くさいというイメージを持っている人も多いと思います。私も本を読むのは好きなのですが、図書館に行きいざ本をめくると、細かい字で難しいことが書いてある気がしてどうしても借りる気になれないことが多いです。しかし、読み始めると夢中になって最後まで読んでしまうので、やっぱり本が好きなんだと改めて思います。

そんな本の中でも、私が今一番興味があるのは「絵本」です。保育者を目指してから、子ども達に絵本を読んであげることが多く、私も本屋さんや図書館で絵本を読む機会が多くなりました。小さい頃から絵本は好きで、親に買ってもらった絵本を暗記するくらいよく読んでいたのを覚えています。しかし、

幼児教育学科2年 平林 優子

大きくなるにつれ絵本もあまり読まなくなり、短大で保育の勉強をするようになり久しぶりに読みました。大人になってから読んでみると、昔は何げなく読んでいた中にも、心が温まったり、残されていた大切なことを思い出したりというものが沢山ありました。また、子ども達に絵本を通じて伝えられることが沢山あるのだと思いました。絵本を通して、本にも以前より興味を持てるようになりました。

絵本だけでなく、本を読むことによって想像力もつき、活字にも慣れ、様々な知識を得ることができると思います。私ももっと本に親しんで、様々なことを学んでいきたいと思っています。



図書館ボランティア

総合文化学科1年 沼田 亜純

夏休みの後半、私は図書館ボランティアに参加させていただきました。今回のボランティアでは蔵書点検をすることになっていた。私は図書館二階の閲覧室の本を調べると思っていたのだが、実際に点検をしたのは一階及び地下一階の書庫であった。書庫には初めて入ったが、閲覧室以上に様々な本が棚に納められており正直、驚かされた。

さて、私が蔵書点検をするのは高校三年の時以来である。高校の時の蔵書点検は本を棚から全て出し、それから目録カードを本に挟んでいく、という労力のかかる点検の仕方をしてきた。だが、この短大の蔵書点検の仕方は本のバーコードを赤外線を読み取り、本の数を確認していくという簡単な作業であった。作業は単純であったので、すぐに覚えることができた。司書の先生方は「一日、千五百冊ぐらい数えられればいい」とおっしゃっていたが、

本のバーコードを読み取っていく作業が意外とおもしろく、一日で約三千冊の本を確認することが出来た。他のボランティア参加者の働きもあり、予定よりも早く蔵書点検を終わらせられたので、今度は受け入れの作業をさせていただいた。私はラベルに透明なシールを貼る係になった。簡単な作業かと思ったが、シールに空気が入ってしまうと見た目が美しくなく、ゆがんでしまうので手に汗をかきながらシールを貼った。

今回の図書館ボランティアでは司書の仕事の裏側を見、学ぶことができた。普段私たちが見ることのできない蔵書点検、本の受け入れなど、これから司書課程を履修していく上で、とても良い経験になったと思う。ここで学んだことを忘れずに次のステップへ進んでいきたい。

本と私と図書館

日本文化学科2年 下澤 佐織

読書の秋に相応しい季節になりました。外も紅葉の時期が近づき、冷たい風は木々をゆらします。そんな日は、温かい飲み物と本を片手にゆったりと過ごすなど、いかがでしょうか。こうしたなにげないひとときこそ、気持ちが落ち着くと思うのは、私だけではないと思います。

私が読書を好きになったのは、図書館へよく行くようになってからです。始まりは小学4年生の頃。休み時間になれば毎日のように図書館に行っていたのを覚えています。次は何を読もうかとわくわくしながら本棚の本を眺めていました。そして、徐々に読書の楽しみを覚え、図書館の心地良さを知っていきました。図書館は私の憩いの空間であり、大切な場所です。正直、私は多く本を読む方ではないと

思います。でも、図書館にいるとそれだけでとてもリラックスすることができるので、とても図書館が好きです。何の本を読もうかと選ぶだけで時間は過ぎ、本を読み始めると、他のことなど耳に入らなくなっています。そんなときは、気持ちがすべて本へと真っ直ぐに向かっているのだと思います。

“本は心の栄養”とはよく言ったもので、読書をたしなむことでの心地良さ、学ぶことの面白さ、知ることの楽しさ、考えることの大切さなど、図書館を利用し、本を読むことで育まれる気持ちも多いのではないのでしょうか。そして、読書は新たな情報を与え、価値観、感情が生まれ、豊かな心へと成長していくと思います。



上田情報ライブラリー実習

総合文化学科1年 天野 恵

今回図書館実習をやってみて、授業だけでは知ることのできなかったことをたくさん知ることができました。

実習に行ったのは一週間ですが、一週間のうち3日間はセミナーや講演会などのお手伝いをさせてもらいました。会場作りから始まり、受け付け、ホームページ用の原稿作成など様々なことを経験することができました。

また、現場の仕事としても配架・蔵書整理・貸出・返却・新聞の整理・ブッカー・図書を受け入れ・雑誌の入れ替えなどをやらせてもらいました。その中で一番難しいと感じたのは、“図書の分類”でした。大まかに分類することはできても、細かい部分での分類は本当に難しいと思いました。

そして、一番驚いたことは実習に行った図書館に置いてある新聞や雑誌の種類の多さでした。このことを指導して下さった職員の方に尋ねたところ、「自宅で読める新聞や雑誌の種類には限りがある。また図書館員としてはカウンターでお客さんから新聞で見た本や雑誌を探しているなどの質問もあるので、それに応じられるように、多くの新聞や雑誌をチェックするように心がけている。」とおっしゃっていました。

この実習では、授業では学べないような実際の作業や図書館で働いている方の考えや心がけなどを知ることができて、充実した実習になりました。またこのような機会があったら、ぜひ参加したいと思いました。

図書館を経験すること

総合文化学科 木内 公一郎

平成16年夏季休暇期間中、図書館司書課程の学生を対象に公共図書館における自主実習を実施した。

1.参加人数:1年生11名、2年生3名

2.協力図書館:上田市立図書館、上田情報ライブラリー、小諸市立小諸図書館、佐久市立図書館

事前指導では図書館業務の説明だけではなく、人間関係を含めた職場環境をいかに自分の力で構築していくかということも重視した。

実習先の図書館からも苦情もなく、学生はそれぞれ熱心に実習に取り組んでいた。しかし授業で学んだことを実践することの難しさも体感したようである。来年に向けて実習のさらなる充実に向けて取り組んでいきたい。

本学教員の 新刊著作

(本年中に発行された単独著書・共著・分担執筆)

著者名の五十音順

* 市東賢二先生

『ソーシャルワークとケアワーク』 (中央法規出版) 2004.3月刊 3,000円 (共著)

『新版 保育士をめざす人の社会福祉』 (みらい) 2004.4月刊 2,000円 (共著)

『ポイントで解説 幼稚園・保育所・福祉施設実習ガイドブック』 (みらい) 2004.10月刊 1,900円 (共著)

* 西山秀人先生

『和歌文学論集 古今集 新古今集の方法』 (笠間書院) 2004.10月刊 7,800円 (分担執筆)

* 平岡さつき先生

『人間形成論の視野』 (大月書店) 2004.3月刊 4,800円 (共著)

図書館ガイド

本学の図書館で入手できない資料の文献複写・相互貸借利用について

本学図書館はもちろん、中小の図書館は図書や資料をすべて所蔵しているわけではありません。そこで、他の図書館や研究機関の所蔵する図書を相互に貸借しあったり、文献を複写して郵送してもらったりする、「図書館間相互利用制度」が図書館の世界では確立しています。

相互協力には大きく分けて次ぎの方法があります。

1. 図書の相互貸借・・・ 国立国会図書館・公共図書館・大学専門図書館等の所蔵する図書を借受けする。
 昨今、多くの図書館が蔵書をインターネットに公開しています。それを検索してその図書館が所蔵する図書の借受を依頼する。但しすべてのものが借受できるとは限りません。制限のあるものはできません。
2. 雑誌や書籍の複写依頼・・・ 図書が借受できない場合、図書の一部分をコピーしてもらったり、雑誌の論文を複写して郵送してもらう。
 文献複写を依頼する場合には、あらかじめ「書名」「雑誌名」「巻・号」「出版社名」「出版年」「論文名」「執筆者名」等が判明していなければなりません。
 また、それが何から判明したのか出典・典拠も必要です。

以前は、各図書館同士が直接郵送やファクシミリで申し込みをしていたのですが、今年度から国立情報学研究所で構築しているILL制度に「文献複写等料金相殺サービス」というシステムが導入され、インターネット回線を利用した文献複写等のサービスが始まりました。

この方法は、「依頼」「受付」の処理・料金計算・代金支払い等をコンピュータ上で処理するもので、毎回の代金支払いや、振込の手間が省けるだけでなく、複写物がスピーディに届くという大きなメリットがあります。本学でも早速利用を開始していますが、依頼・受付ともに件数が倍増しています。

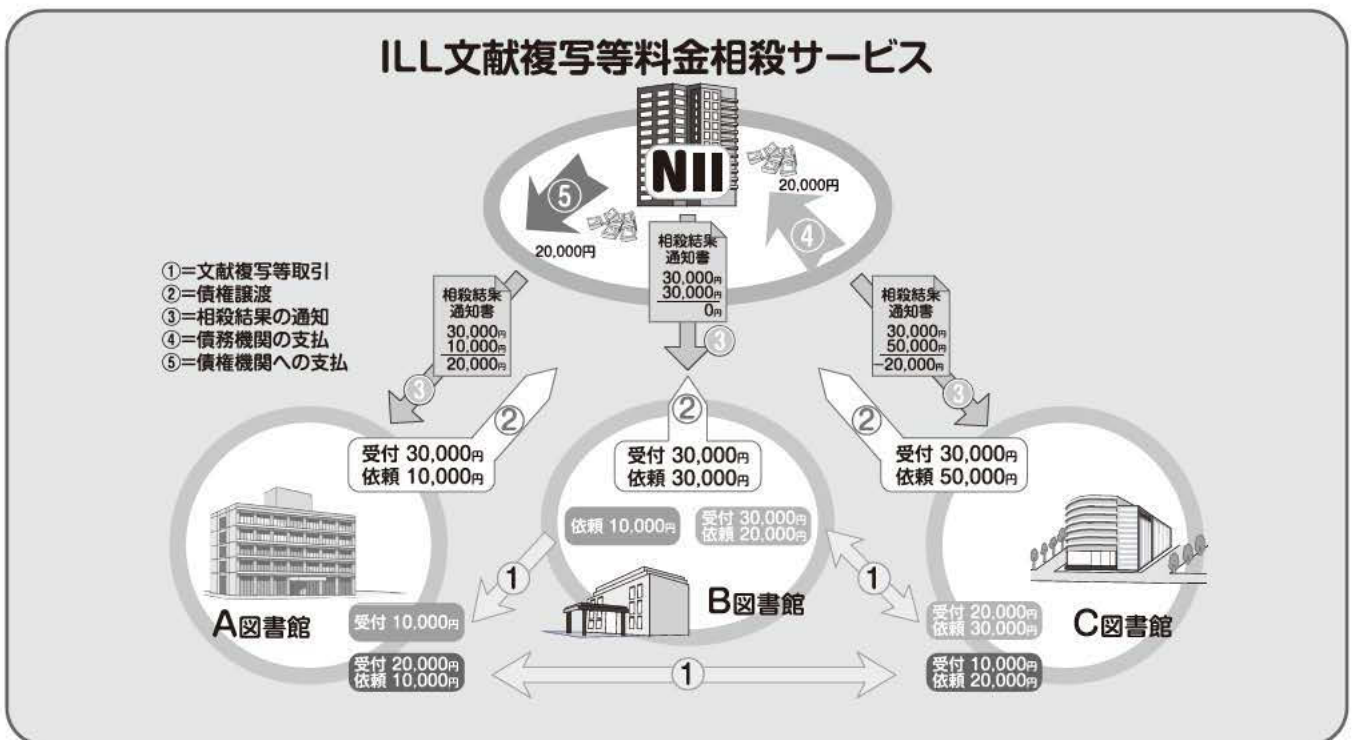
なお、コピー料金等は依頼する図書館の決まりで統一料金ではありません。1枚当たり30円～50円前後するのが通常です。それに郵送料が加算されます。到着したら複写料金は経理課に支払うことになります。

利用者は、必要性が出たら早めに図書館に申し込みましょう。相殺制度利用でスピーディになったとはいえ、相手方の業務の都合がありますので早い依頼が大切です。

なお、未だ相殺制度に加盟していない図書館への依頼は、従来どおり郵送やファクシミリに頼らざるをえません。その上、代金前払い制のところもありますのでより早い申し込みが必要です。

不明な点は、司書に相談して下さい。

(N)



図書館 ニュース



第5回 七夕文学賞

◆恒例となりました七夕文学賞も、本年は右記のみなさんの作品が受賞となりました。

優秀賞

短歌

日本文化学科 2年 徳竹 絵梨子

天空に ふたりを渡す 橋架かる 年に一度の 鵜の橋

佳作

俳句

日本文化学科 2年 町田 純子

風鈴の 音色で 織り込む 夏模様

佳作

俳句

中国留学生 趙 文娟

鵜の 鳴き声に懐う 国の星

佳作

自由詩 「星への願い」

日本文化学科 2年 茶谷 寿恵

あなたに逢える
年にたった一度だけの夢の刻
だからお願い
星のシャワーを
ふたりに注いで

(添削は長田真紀先生)

編集後記

a postscript by the editor

「みすず」31号をここにお届けします。
右も左もわからない私が、みすず31号の編集責任者という大役を委員長から命ぜられました。執筆くださった先生方、学生の皆さんならびに、編集に当たりお力添えを頂戴した多くの皆様に深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

(N)

みすず

第31号

上田女子短期大学附属図書館報
2004.12 発行

編集:上田女子短期大学図書館紀要委員会
発行:上田女子短期大学附属図書館

〒386-1214 長野県上田市下之郷乙620
Tel:0268-38-6019 Fax:0268-38-6019
EX-ℓ:lib@uedawjc.ac.jp